



美術館正面
撮影：来田 猛

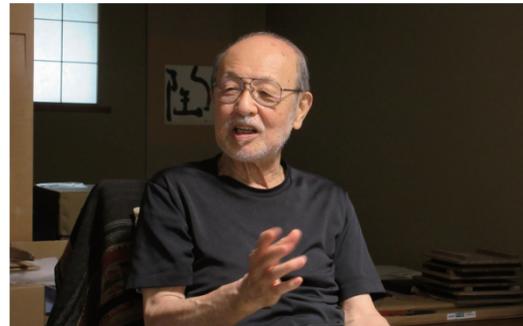
design: Shibano Kenta

新装版「作家にきく」no.10

「京都市美術館ニュース」第14号(昭和33年)より連載していた「作家にきく」。装い新たに再スタートを切りました。第10回は森野泰明さんです。

森野泰明(もりの・たいめい)

陶芸家。1934年、陶芸家・森野富光を父に京都市に生まれる。京都市立美術大学卒業、専攻科修了。在学時であった1957年日展初入選、1960年日展特選・北斗賞受賞。1962年よりシカゴ大学に招聘されて渡米、同大学の講座を担当。日本陶磁における伝統的な美意識を持ちつつ、現代的な形態や文様、装飾性を追求し続けている。また、明快な色彩や清新な構成美が光るオブジェなども制作し、その横断的な作域は高い評価を得ている。日本芸術院会員。2019年旭日中綬章、2021年文化功労者、2024年京都市特別功労賞受賞。



自由闊達な熱気溢れるアメリカへ

登り窯が多くある五条坂のやきもの町に生まれて、近所の友だち同士で「大きになったらちゃん屋になる」と言っていました。昭和29年に京都市立美術大学(現京都市立芸術大学)に入学して、33年に陶磁器科を、35年に専攻科を修了して、2年間非常勤講師として残り、37年にアメリカに行きました。シカゴ大学に「働かせてほしい」と手紙を書いて自分の陶芸観と作品のスライドを送ったら「来てください」と返事をもらい、渡米したら3日後から授業をすることになって驚きました。道具は違うし、ロクロは反対に回し、勝手がわからないでしょう(笑)。戦後まだ17年しか経っていないのに日本人の私に陶芸の講座をすべて任せてくれたんです。そこから3年半アメリカにいて、シカゴ美術館で展覧会もしました。

アメリカ人にとっても土でものを作ることへの興味は共通していてね。広大な土地にはいくらでも陶土があるし、現在では陶芸科は女性が多いですが、アメリカではすでにそうでした。28歳の時に行ったので学生たちとも年が近くて、女の子たちは今おばさんになって趣味で陶芸を続けているかもしれないね(笑)。

伝統を持たないアメリカでは新しい芸術や陶芸の分野も伸び伸びとした活力に溢れていて、そこに身を置くことは自分の立ち位置を見つめ直す絶好の機会になりました。日本もアメリカも同時代性という横糸で繋がっていますが同地域性ではありません。そこに住む理由があり、出会いがあり、アイデンティティが生まれる。私のルーツで言うと、京都に生まれ、京都弁を話し、無意識のうちに京都が自分の中にある。それを今の表現で発信していけば国際的に通用すると思っています。

京都における作家たちの縁と交流

京都市立美術大学の先生として京都に来られた富本憲吉さんは河原町丸太町近くに住んでおられて、磁器の生地は泉涌寺の登り窯で焼成し、色絵の装飾を焼く時はうちの親父の所の電気窯の設備を利用していました。私が陶磁器科に入った時は富本さんと近藤悠三さんが先生で、3回生の時に藤本能道さんが来られました。



森野泰明
《Work 87-25》1987年
京都市美術館蔵

学生は全学年で20人ほど。ひとつの教室で家族のようでした。藤本さんがオブジェを作り始めていたからわれわれもやり出したところがあって、4回生の時には同期の柳原睦夫さんと4人で河原町四条にあった京都書院の画廊で「4分の4」という展覧会をしました。作品について富本さんは特に何も言わないのですが「真似をせずに自分のものを作りなさい」という教えでね。先祖代々の陶器屋とは違って若い時に留学もして独立精神がある先生と出会えたことは、私にとって幸せなことでした。

3人の先生は師弟関係でもそれぞれ表現が違う。後に色絵に向かわれた藤本さんも走泥社の展覧会にはオブジェが出ていたでしょう。彫刻科で同学年の宮永理吉は辻管堂さんに可愛がられていました。辻さんは泉涌寺で、八木一夫さんは五条坂の窯で焼いて。あの時代は面白かったですね。走泥社は今で言う陶彫と見比べても全然違う。京都の地下茎は太くて、そこから出てきた芽です。理屈ではなく、根があって自然に生えてきたようなオブジェなんです。

互いに会話をする余暇もあって良い時代でしたね。必ず誰かがいて交流できるバーや小料理屋があって、下村良之介さんや八木一夫さんや鈴木治さんなんかがいる。それから京都市美術館の裏庭で年に一度、美術懇話会もありましたよ。

土と炎と釉薬が作り出す「やきもの」の本質

私が求める陶芸は形と色と模様響き合っただけでなく、一体感を持つもの。結局、釉薬の仕事なんです。火の洗礼を受けて人の力が及ばない変化があるのがやきもので、まずは釉薬の性質を知らないといけないんです。模様から着想しても釉薬が言うことを聞かない場合がある。私が最初に使い始めた色はトルコブルーでね。例えば全体にブルーがあって、ある釉薬をかけると黄色になって、黒を重ねたり、アクセントとしてさらに細工をすると下からブルーが出てきたり。釉薬の重なりやにじみの意外性を知るためにたくさんのテストピースも作ります。それから緑を使うのがとても好きで、緑を置かないと気が済まない(笑)。釉薬とフォルムの絡み合いの中で材質感と色彩が互いに響き合うものを作りたいんです。

日本の美術工芸は美術館の空間で緊張感を持って自立完結するというより、その先に作品が行くべき場所があります。つまり人間が生活する豊かな空間に置くために、人に向けて自分を表現することになる。やきものを通して、ものの捉え方を含め、私の空間と誰かの空間が出逢って、人との関係が生まれます。長谷川等伯の屏風は現在では絵画として捉えるところがあるけど、実際は間仕切りの屏風として使っていたんです。アートと用途が一緒になっているのが日本の美術の良いところなんです。

(聞き手：当館学芸担当/構成：かなもりゆうこ)

吉田孝次郎(よしだ・こうじろう)

1937年、京呉服白生地卸商の次男として京都に生まれる。1948年、祇園祭の北観音山の囃子方となる。1961年、武蔵野美術学校油絵科を卒業し、同大学造形学部の助手となる。1980年、生家の町家を復元改修し、「京都生活工芸館・無名舎」を開設。2014年、祇園祭山鉦連合会理事長として、前祭・後祭の巡行復興を成し遂げる。渡来染織品研究家。

* 吉田氏は2025年7月18日に御逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。



民藝との出会い

水尾比呂志氏と出会ったのは武蔵野美術学校でのことですね。『古都の障壁画』(1963年)という名著があって、そこに書かれている住まいに興味を持ち、それを紹介した水尾氏にも興味を持ちました。当時水尾氏は武蔵野美術学校の非常勤講師で、私は助手をしていました。民藝館(現在の日本民藝館)では物を親しく見ると同時に、浅川園絵(浅川巧の長女)というベテランのキュレーターがいらっしゃって、その浅川園絵のお母さんが京都の高等女子学校出身であったことから親しみ深く思いました。その園絵さんを通して民藝館に親しみを感じていました。

水尾先生を中心とした無名舎という同好会に参加し、私が担当した一番大きな仕事は柳宗悦の京都時代の調査でした。柳宗悦を伝説的な人物として捉えるのではなく、ドキュメントとして柳宗悦がどのように生きてこられたかを追いました。柳の京都時代を担当することによって、初期の民藝運動に関わった、柳宗悦を刺激した人たち、中村直勝、「ちょっかつさん」って言いましてけどね—それから村岡景夫、寿岳文章を歴訪し、インタビューをさせていただいたんです。

京都の民藝運動

京都の人たちにとって、民藝とは大したことじゃなかったんだねえ。例えば私の町内にある三井の屋敷、また向かいの松坂屋伊藤次郎左衛門商店も豪壮なものですし、そんな所ではとても民藝云々が齒が立たない程のしっかりとしたもんです。そんなものを当たり前で享受していた京都の人たちは、民藝運動というのはほとんど齒牙にも掛けなかったのではないのでしょうか。私が京都へ帰ってから、松本の民芸家具を私が買い求めて、人様に見ていただく機会ができたんですが、ほとんど影響を与えてないでしょう。千年の都と人と言いますが、長い時間に耐え忍んで伝えられたものと、にわかな運動意識に支えられたものとの差は、そのへんが大きく違うんじゃないですかね。でも、私の家の中にある松本民芸家具というのは立派なものですよ。あの、松本の家具は購入されて各地方に分散していくわけですが、それぞれの地方によって材木や素材の収縮率が違うので、それを微調整するとかね、そういうところまで創業者・池田三四郎は面倒を見ていた人です。

げ ても の 下手物から収集へ

(当時は)初めて聞く言葉ですからねえ。その時は下手物というようにものだけど、床の間に飾ってあるような上手物に比べれば、私の家の身辺にあるものっていうのは、全部下手物だったということです。そういうことで私自身、わりに民藝に親しみをもちやすかったと思います。こういう家の備品というのは、全部、下手物に属するものであった、ということは間違いない。一番最初に柳宗悦が下手物に惹かれたのは、我孫子で墓参りをしていた時に「たわし」があり、興味を持った。これはうんとアップークラスの人の眼なんです。本当にたわしを使っていた人の眼では

ない。彼らにとっては、天神さんや弘法さんに並んでいるものは薄汚いもんだという印象があって、直接手で触れるようなものではなく、傘の先でつまんで、「これどういふもの?」「これいくら?」と聞いたようです。

(吉田氏が収集を始めた当初、)それは最初は、柳宗悦たちがしたことの真似事だったでしょう。だけど京都には、うんと昔から、(毎月)21日の弘法さんと25日の天神さんというのは露天市として、人様に非常に愛されていたでしょう。私も真似事で行って、いくつかのものを拾いました。(吉田氏のものを見極める基準は)直感でしょうな。理屈ではない。彼らもよく直感って言うこと言いますが、同質のものであるかどうかわかりません。だから私が物の美否を判断するのは瞬間芸です。美味しいとか美味しくない、とかいうことの判断も瞬間芸でしょうね。瞬間に判断できるぐらいに私は、硬い言葉を使えば、ずいぶん勉強しはった人ですね。

非常に大事なところなんです、いわく言い難しで、見た目にも、持った時にも「美しく感じる」「感じないか」。床の間に飾っているようなものではなく、この家の中にある什器備品は日常生活に使っているもので、親しみを持てるようなものばかりです。民藝という言葉そのものも、私にとっては一時期、邪魔な言葉のような時期がありまして、あの『民藝』という雑誌やなんか、全部捨てましたね。理屈ではないということの証明のために。それぐらいに言葉からヒントを得て取捨選択をすることは未だにありません。(吉田家で)使われているものを見ていただければ、吉田がどういふ様なものを民藝として評価しているか分かっていたらと思うんです。

今も昔も、本当にいいものっていうのはそんなにあるもんじゃない。だからって無いものでもない。何か掘り出してやろうというようなことでは、物は選べません。500円や1000円のものでも、光輝いてるものは、光り輝いてますしね。

こういう使い方したらいい、という観点は持ったことがない。ずばりそのものだけ。「ああ、これは初期伊万里だ」ということだけで。初期伊万里だから美しいなんてことは言いませんが、それは「人が気がついてないもの」というのもなく、「気がついていても過ぎ去っていった」ような印象を与えるものが私には、ピッと強く反応しますから、それは値段に関係なく買いますね。

何十年見続けても飽きない、見飽きない美しさを持っていますね。本来民藝っていうのはそういうもんです。時間が経ってもその時間に耐えうるだけの力を持っていますね。

2025年2月 京都生活工芸館・無名舎で実施
(聞き手：広中雅子氏、田倉尚人氏、松原龍一氏、当館学芸担当／
協力：相澤恵美子／構成：当館学芸担当)

「展覧会情報」
特別展「民藝誕生100年—京都が紡いだ日常の美」
2025年9月13日～12月7日 会場：本館 南回廊1階

「ザ・トライアングル 佐俣和木：京都に眠るスポーツの地層を掘り起こす」

京都は言うまでもなく古都だ。8世紀から明治維新で首都が東京に移るまでの長きにわたって、なにごと京都がその中心地だったのである。スポーツも例外ではなく、さまざまな競技の発祥地が京都である。そもそもスポーツの起源をたどると、神事にいきつく。宮中でおこなわれていた射礼や競射は弓をつかったスポーツに繋がるし、相撲、競馬、打球と呼ばれるポロのような遊戯も宮中の神事だった。やがてそれらの宮中行事は武芸と民衆の遊戯とに分離していく。流鏑馬、笠懸、犬追物、牛追物は騎馬の的あてであり、巻き狩りや鷹狩は狩猟だった。いずれも武士が心身を鍛えるための武芸である。一方、民衆は石合戦や相撲、水泳、鬼ごっこや手鞠、羽根つき、凧あげ、綱引きなどに興じた。スポーツは遊興として根づいたのである。

近代スポーツを日本にもたらしたのは明治政府によって招聘された「お雇い外国人」たちである。彼らは欧米の学問を教えるかたわら、その生活様式を日本に持ち込んだ。そのひとつが余暇の活用であり、趣味としてのスポーツだったのである。スポーツといっても起源をはじめ、その定義は星の数ほどあり、広義には「余暇を利用した身体をつかった活動」であるが、そこに「競う」という要素や、「遊び」も含まれるのである。¹

佐俣は、美術作家でありながらディスクゴルフという競技のプロ選手でもある。競技を始めたきっかけは、コロナ禍に生じた余暇の利用だった。こういう人は意外と多いかもしれない。佐俣の場合は、急激にディスクゴルフにのめり込み、公式戦で活躍を続け、今や女子プロの国内ランキング2位²の実力者である。選手として公式戦でプレイするなかで、美術作家としての佐俣は、スポーツの構造的な問題とそれを内包する社会的な問題に接し、競技スポーツの領域にとどまらないより拡張したイメージを作品のなかに持ち込むことで、スポーツとの向き合い方を捉え直すことを試みてきた。今回、佐俣はスポーツをどのようにアートに昇華し、提示してくれるのだろうか。

あくまで現状、という断りをいれておく。佐俣はいま「どこでもすぼ〜つ」と銘打って、京都市内に眠るスポーツの地層を掘り起こそうとしている。貴賤入り交じり、多くの人が暮らした京都では、今はなきスポーツ振興の痕がそこかしこに眠る。当時の人々は、今は違った見方でスポーツを見ていて、違った観点でプレイをしていたかもしれない。そうした過去の感覚を追い求める行為は、私たちが見失いつつあるスポーツの「ゆとり」や「遊び心」を、別の形で蘇らせる手がかりになるのではないだろうか。

中山摩衣子(本展担当学芸員)



佐俣和木作品参考画像

- 1 スポーツの起源については以下のURLを参考にした。
(<https://www.ssf.or.jp/knowledge/history/sports/05.html>)
- 2 2024年度ポイントランキングレディース部門2位
(http://www.jpdbg.jp/tournament_pointranktop3.php?division=&year=2024)

佐俣和木(さまた・かずき)

1994年町田市に生まれる。多摩美術大学情報デザイン学科卒業。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。在学中からグループ展などに参加し、積極的に作品を発表する。最新の個展は「You Dream About?」(京都、2024年)。特に近年は、スポーツを題材にして、個人的なものから社会的なものまで根源的な問いをユーモラスな仕掛けでもって提示してきた。2020年にディスクゴルフを始め、現在プロ選手としても活躍中。

「展覧会情報」
ザ・トライアングル 佐俣和木
2025年12月3日～2026年2月15日 会場：ザ・トライアングル

コレクションルーム秋期 特集「こどもへのまなざし」



三谷十糸子《朝》1937年 京都市美術館蔵

「展覧会情報」
コレクションルーム秋期 特集「こどもへのまなざし」
2025年10月24日～12月14日 会場：本館 北回廊1階

秋のコレクションルームでは、「こどもへのまなざし」と題し、近代美術における、子どもをテーマとした作品を集めます。

私たちにとって子どもとは、いったいどのような存在でしょうか。かわいらしくて、純粋。自由で、少しあやうささを感じるもの。こうした子どもに対する認識は、近代になって改めて発見されたものともいえます。

というのも、本格的な児童教育は明治時代になってから、西洋にならって導入されたもので、そこで初めて「子ども向け」の文化が見直されたからです。のち大正時代には児童向け雑誌や童話などが登場します。子どもとはどのような存在か。家族とはどのようなものか。そのような問いや、そこから生まれた視線は、近代画家たちの作品にも反映されています。このたび、当館のコレクションから、そうした視線が感じられる作品を集めてみました。

今回特に注目した画家は三谷十糸子(みたとしこ、1904-1992)です。三谷は兵庫に生まれ、女子美術学校で日本画を学びました。その後京都画壇の重鎮、西山翠嶂(にしやますいしょう)の画塾に入り実力を磨きます。昭和初期から平成にかけた長い画業のなかで、三谷がよく描いたのは少女のモチーフです。かわいい服を着て、無邪気に遊ぶ女の子や、少しおすまし顔の若い娘。また子どもを中心とした家族の肖像。画風は初期の写生風から、後期の幻想的画風へと変化していきますが、少女のモチーフは一貫して描き続けています。三谷十糸子の魅力的な作品も多く展示しますので、ぜひご覧ください。

森光彦(本展担当学芸員)